シマを歩き、シマに提言
学生たちが見た宇検村
若者の視点でシマの魅力、可能性考察
須山教授に聞く

毎年、夏になると、大学生のグループが宇検村を訪れる。駒澤大学文学部地理学科（東京）の須山ゼミの学生たちだ。学生たちはシマ（集落）を歩き、人々と触れ合いながら、シマを知り、シマや島に提言を続けている。提言を読むと、若い目がシマの魅力や可能性を教えてくれる。過疎や高齢化を乗り越えるヒントがいくつも出てくる。ゼミを担当する須山聡教授（53）に、「学生たちが見た宇検村」を語ってもらった。

（聞き手・久岡学）

「長周期Uターン」の存在を確認

―宇検村を学生たちの実習地に選んだ理由は。

「奄美大島で地域調査実習を始めたのは2002年度。最初は特に場所を絞らず、島内全域に学生が散らばっていろんなテーマに沿って調査をしていた。宇検村でも名柄・須古・芦検を数人の学生が調査対象としたことがあるが、全体でまとまって宇検村を対象としたのは、14年度から。16年度からは『集落点検』を開始し、今後村内の全集落で実施する予定。学部2年生の調査入門として、16年度からは豊年祭・敬老会に参加させてもらい、準備や相撲・余興などのお手伝いをしている」

―宇検村で実習することによって学生たちはどんな経験をしたか。

「ほとんどの学生は奄美で初めて野外調査（フィールドワーク）を経験する。宇検村に限らず、奄美では人と人との距離が近く、何も知らない学生を住民の皆さんが温かく迎え入れてくれる。学生たちは成功体験を獲得して、一回り大きくなって調査を終えることができる。実習が終わった後も皆さんが学生たちと連絡を取り合い、次の年の実習にも参加したり、卒業旅行や卒業後の観光でも奄美に来る学生がいる。本音で付き合ってくれるシマの皆さんとの交流は、大げさに言えば彼らの人間観を覆すほど印象的なもの」

―これまでの研究内容・成果を教えてほしい。

「調査を始めた初年度は、学生の1人が芦検の景観調査をした。奄美らしからぬ本土式の住宅が、芦検に集まっていることに関心を持ったのですが、話を聞いてみるとUターン、それも本土で40年以上も生活して芦検に帰ってきた人たちのお宅であることが分かった。従来の人口移動研究で指摘されてこなかった『長周期Uターン』の存在が確認されたのは大きな成果だ」

「17年度には名柄のお年寄りの生活パターンを調査した。年を取るとともに行動範囲が縮小することは予想されていましたが、75歳を境に多くの人が自動車の運転を諦めるため、集落からあまり出なくなることが確認された。しかし、おじい、おばぁたちの充実した表情や日々の行動からは、外に出られないからといって不便になるとは一概には言えない。むしろ、体力の低下とともに、お年寄りたちは自由に振る舞える空間を集落の中につくり上げることで、穏やかに過ごす工夫をしていることが分かった」

住民との意見交換を通して地域の可能性と課題を探る「集落点検」―7月9日、佐念

住民意識変える「集落点検」

―集落点検の成果は。

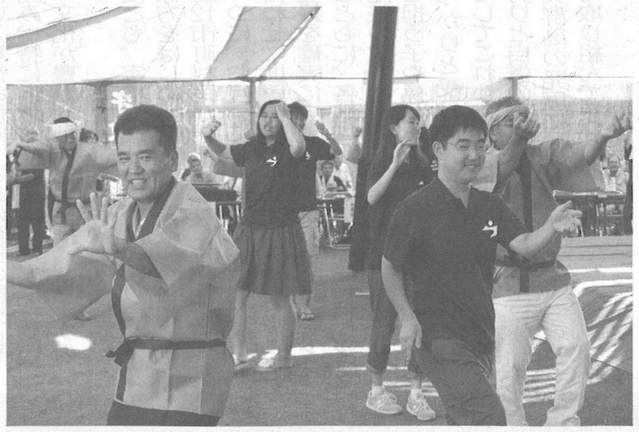
「16年度から取り組んでいる『集落点検』は、いわゆる『限界集落』であっても、住み続けることができる環境を整備することを目的としている。集落の皆さんと学生らが共同で、集落の現状を把握し、集落に住み続ける上での問題点を出し合い、解決に向けての方策を考える。手書きの集落地図を作り、そこに各世帯の家族構成や本土に住む家族の状況を書き込んでいくことが大きな特徴。行政や企業の補助金や力に頼るのではなく、自分たちができる範囲で、無理なく、息の長い方策を考える、手作りの地域おこし。昨年度は宇検集落、本年度は部連・佐念集落で実施した。どの集落でも半数以上の皆さんに集まっていただき、活発な議論が繰り広げられた」

「宇検集落での集落点検では、住民と学生の議論から、集落を住みよくする15の提案が出された。①共同売店をきれいにして買い物しやすくする②空き家活用で整備された「みんなのいえ」で学童保育を始める③集落にAED（自動体外式除細動器）を設置する④公衆無線LANを設置する⑤郷友会と連絡を取り合い、本土にいる出身者を豊年祭に呼ぶ―といった、すぐにでも始められることばかり。一つ一つの提案は小さなことだが、アイデアが積み重なることで、集落のよさを生かしたまま、生活環境を改善することができる」

―課題もあったのは。

「集落点検を実施したことで、住民の皆さんの意識に変化が表れたことも、大きな成果だった。宇検集落に限らず奄美大島の集落は、一見結束が固く、住民間のコミュニケーションが円滑なように見えるが、世代間、男女間のギャップが大きなことが隠れた問題点であると、学生たちから声があった。ジェネレーションギャップ・ジェンダーギャップは、長幼の序を重視する奄美の規範につながるものです。500人もいる大きな集落ならばさほど問題とはならないが、100人を切る小集落で、内部にギャップがあると、集落の運営にもさまざまな不都合をきたす」

「学生たちが考えたことを率直に表現させられなかったのは、私の力不足だと後悔しています。しかし、今年から青壮年団の有志が、高齢者と共に集落の耕作放棄地で野菜を作り始めました。聞くと、彼らも世代間のコミュニケーション不足を日頃感じていたとのことで、集落点検に触発されてこういうことを始めたのだと話してくれました。やってみると、高齢の先輩たちは自分たちが知らないことをたくさん知っていて、もっといろんなことを教えてほしいと感じたとのことだった。耕作放棄地を利用すること自体が集落空間の活用だし、世代間ギャップの解消につながればとてもよい実践だと思う。このように住民の皆さんの意識を変えるきっかけになるのならば、集落点検をした意義は大きい」


住民、出身者と一緒に踊り、敬老会を盛り上げた学生ら―9月10日、宇検

敬老会・豊年祭に参加。振り出しも体験した男子学生―9月10日、宇検

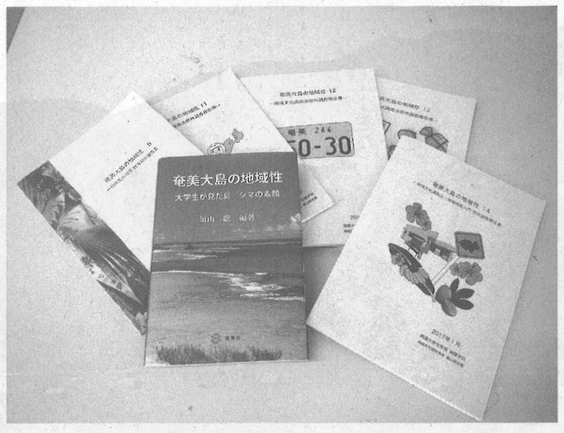
若い人を引きつける
鍵は子ども

―点検を踏まえて村への提言を。

「集落点検で出されたアイデアの中には、おカネのことをはじめ、集落だけではできないことがある。住民のアイデアを実現するため、村は住民の意見をもっと積極的に取り入れ、住民が『足りない』というものには支援を惜しまないでもらいたい。戦後、宇検村は猛烈な過疎に苦しめられてきた。人がいなくなるのは何より寂しいこと。しかし、私の計算では、宇検村で生まれた人のうち4、5人に1人は60歳までには村に帰ってきている。出て行った時は1人でも、帰ってくるときには家族を連れてくるから、実際にはかなりの割合でUターンしている。この流れをもっと太く、確かなものにする必要がある」

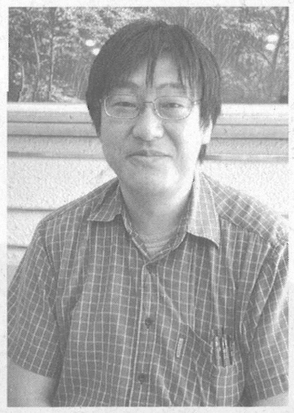
「若い人を引きつける鍵は子どもだ。名柄・阿室校区が取り組んでいる山村留学は、若い家族を引きつけるとても有効な方策。山村留学の最大の基盤は、住民の皆さんの受け入れ態勢です。多くのIターン家族から、集落の人が子どもを自分の孫のように面倒見てくれる、という話を聞いた。本土では失われた人のつながりが、子育てする上ではとても助けになる」

ハブ用心棒の形状、配置状況を調べる学生―15年7月1日、須古



学生たちがまとめた報告書と「奄美大島の地域性」

須山ゼミの活動



ゼミは3年生が中心。10～15人程度が所属し、6月下旬～7月上旬、約1週間の調査実習を実施する。調査の後、約4カ月をかけて調査報告書を作成する。2014年には、それまでの報告書をまとめて「奄美大島の地域性―大学生が見た島／シマの素顔」を刊行した。奄美を対象に卒業論文を書く学生も、毎年数人いる。「昨年度から実施している『集落点検』は、お世話になっている奄美の皆さんに対する恩返しの意味でも、全力で取り組んでいきたいと思っています」

（須山聡教授）